

## 目を見る？口を見る？表情認知における注意の差異 —事象関連脳電位による検討—

湯山 レミ

指導教員 高橋 伸幸

日常生活において、他者と顔を合わせ、コミュニケーションをとるような場面は数多くある。我々は自分の情動を表情を通して相手に発信し、相手の顔を見てその表情から相手の情動を読み取る。このような情動表出や情動解釈について、西洋と東洋で文化差があることが明らかになっている。Markus & Kitayama (1991) は、個人主義的な西洋の文化では自己主張が重要視され、情動をありのままに表出する傾向がある一方で、集団主義的な東洋の文化では周囲との調和の維持が重要視され、情動表出を抑制する傾向にあると報告した。また、Yuki, William, & Masuda (2007) は、表情に基づく情動解釈時にアメリカ人は日本人と比較して口からの情報を、日本人はアメリカ人と比較して目からの情報を重要視することを明らかにした。本研究では日本人を対象として、情動解釈よりも前のプロセスである情動検出時の目および口の変化に対する注意の配分量や情動検出の早さの違いを事象関連脳電位 (event-related brain potential : ERP) の P300 成分を用いて検討した。注意は意図的に向ける注意である能動的注意と、自発的に引きつけられる注意である受動的注意の2種類に分類できるが、前者に対しては P3b、後者に対しては P3a という異なる P300 成分が惹起される。本実験では、コンピュータで作成した顔刺激を用いて3刺激オドボール課題を行った。標準刺激には真顔を使用し、標的刺激は、標準刺激である真顔の顔部位（目もしくは口）を変化させることで作成した喜び顔もしくは悲しみ顔を使用した。非標的刺激は、標的刺激と同様の情動を表す顔刺激を使用した。3刺激オドボールパラダイムにより、標的刺激に対して P3b、非標的刺激に対して P3a が惹起するため、目や口の変化に対する能動的注意と受動的注意の両方を検討することが可能となった。本実験の結果、受動的注意についてのみ、情動と顔部位の交互作用効果に優位傾向が見られ、喜び顔を検出する際は口の変化よりも目の変化に対して、目の変化を検出する際は悲しみ顔への変化よりも喜び顔への変化に対して受動的注意が大きく引きつけられた。この結果から、日本人は口の変化に対してよりも目の変化に対して注意が引きつけられる傾向にあるため、目の変化に対してのみ喜びと悲しみの情動間で受動的注意の配分量に差が見られたことが示された。今後、西洋人を参加者に加えることで、情動検出時の目および口に対する注意の配分量や早さの文化差を検討していく。